

【ねがいましては】

令和2年10月25日

第359号

KYOWA SCHOOL

「東大生の親って」

ある日の東洋経済オンラインでの記事です。

『東大生が見た「地頭（じあたま）が良い人の親」に共通の特徴』

副題が、－「勉強しろと言われたことがない」の本当の意味－

です。

もうここまで読まれて、「しまった」と、思っていらっしゃる方がいるのではないでしようか。

では、内容を紹介していきましょう。

まず冒頭から、『東大生の親御さんを取材していて強く感じるのは、みなさん非常に寛大な方が多いと言うことでした。』です。

つまり、お子さんのやっていること、言っていることに対し、頭ごなしに押さえつけていないということでしょうか。『気が長い』ことがわかります。

時折、こいつ何バカなこといっているのだといって、親の考えを無理矢理押しつけようとすることがあるとします。これを一般的な親とします。東大生の親御さんはどのように接するかというと、「なるほど、この子はこんな風に考えるのか」「自分の考えとは違うけれど、でも自分も子どもの考えから学ぶべきことがあるかもしれない」だそうです。対等な立場で常に対処しているそうです。子どもの目線で行けば、「嬉しい」の一言でしょう。そうなると子どもは次から次へと考えをめぐらし、自分の意見を作り始めます。

次、まだまだ世の中のこと、将来のこと、分からぬことばかり。自分はこうなのだと、ひとつの考えにまとめるなど大人でも結構難しいことです。そこで東大生の親御さんたちに共通してみられるのが、『選択肢を用意する』のだそうです。「どんな学校に行きたいの」ではなく、「この学校はこんな特色、あの学校はこんな特色だよ」と、選択肢を複数用意するのだそうです。これなら、自分の考えをまとめやすいですよね。自分がどちらの学校に合っているのかを対比しやすくなります。

子どもの頃から自らの判断で生活する習慣を身につけてきた子どもは、勉強するかしないかも、自然に判断できるようになるのだそうです。ある東大生は、「親を説得できるくらいまで理由をしっかり考えて行動するように決めていたら、いろんなことがうまく選択できるようになった」と語っていたそうです。

『対等な立場で接する』ことがわかります。

東大生は、「自分は勉強しろと言われたことがなかった」と語るそうです。ここに起こりがちな親の感情、「どうか言わなきやいいんだ」ではありません。東大生たちは、『親の質問に誘導されることで、自ら勉強しなければならないと考えるようになった』だけなのです。そこには、度重なる親と子の会話が存在します。対等な会話です。黙って見ていれば良いではありません。

東大生の親御さんたちは、即教えるのではなく、その前後に『質問』を挟むのだそうです。例えば「ドクダミ」という植物についてです。

ドクダミとは、江戸中期の儒学者・新井白石の著した語学書「東雅」にあるように「毒をダミする」が語源らしい。ダミとは、「矯正する」「止める」の意味。つまり、毒を直す、阻止する、草ということになる。(朝日デジタル)

などのように、語源の説明を兼ねて一緒に勉強します。そして、別の名を何というか考えてみようね。しばらくして…おかあさん「十薬」(じゅうやく)とも言うことがわかった。なぜって、十の病気に効くことからその名がついたそうです。」などと…。

そこから子どもの探究心が芽生えます。いっしょになってひとつことを研究し発見するような『仲間意識』が親子間には必要かもしれません。様々な書籍や文献などを自ら検索していく姿が目に浮かびます。それには必要なことがあります。

ことばの能力です。『語彙』になります。「基本中の基本を学校では教えてくれるのだが。だから少しくらいつまらないとか、嫌いだと、そんな気持がやってきても、それを常に楽しむよう心がけようね。」「ほんの少しでも、なぜって感じたら一緒に考えてみようね。」

ここに通う某高校生が歴史にハマっており、現在人生初の論文を作成中だそうです。分からぬことがあると自身現場の教育委員会へ出向き、参考文献を見せてもらったりしているそうです。好きだから動けるのです。楽しいから動けるのです。そこには誰とも比較をすることもない、自由な時間があり、自由な世界が広がっています。

その子のお父さんがこれまた大の歴史好きなのだそうです。きっと、対等な会話で花咲く時間をたっぷりと過ごされてきたのでしょう。「勉強しなさい」は皆無ですね・・・。想像できます。